

戦争などに代表される目に見える暴力をはじめとして、さまざまな形の暴力(見えないものも含む)がなくなることをめざす、平和学という学問があります。また、平和学とは、社会における正義を追求し、平等な権利を獲得し、環境の中における生存などの問題に積極的な形で関わっていく学問でもあります。ただ、「学問」といっても、理論分析ばかりをするのではなく、実践を大事にします。実践から学んで理論を構築し、またそれを、実践に生かしていくことが、平和学のアプローチです。

以下、平和学による暴力の定義について、議論の時系列で説明します。

### <ピースレスネス＝「非平和」>

平和学は、冷戦開始後の1950年代に本格的になりました。1968年には、インドのスガタ・ダスグプタという平和研究者が、「南の世界(いわゆる開発途上国)においては戦争がないからといって平和とは言えない、戦争がなくともおびただしい死者がいる」と指摘し、この状態をピースレスネス(peacelessness)＝「非平和」とよびました。そして、これらの死者をださないための方法、政策を探究することも平和学の課題であると主張したのです。

### <「消極的平和」と「積極的平和」>

ダスグプタのこの指摘は、ノルウェーのヨハン・ガルトゥングに影響を与えたとされています。翌1969年に、ガルトゥングは、「平和＝戦争のない状態」と捉える「消極的平和(negative peace)」という概念を編み出しました。また、「構造的暴力(structural violence)」とは、社会構造の中に組み込まれている不平等な力関係、経済的搾取、貧困、格差、政治的抑圧、差別、植民地主義などをさすと主張しました。そして、そういった「構造的暴力(structural violence)」のない状態を「積極的平和(positive peace)」とすると提起し、平和の理解に画期的な転換をもたらしました。

戦争、さらには、実際に目に見える暴力を「直接的暴力(direct violence)」と呼びます。物理的に暴力を加えたり、言葉によって他者を傷つけたりするようなことです。そして、「消極的平和」とは、「直接的暴力がない(だけの状態である)」として、「消極的」に平和概念を表現する定義となっています。それに対して、「積極的平和」は、「構造的暴力がない」というだけではなく、次第に「積極的な」定義付けがなされるようになりました。社会正義があることや医療システムの恩恵を受けられることなどは、積極的な平和の定義です。

### <「構造的暴力」>

上記のように、構造的暴力がない状態とは、社会正義がある状態をさすと考えます。よって、積極的平和とは、経済的・政治的安定、基本的人権の尊重、公正な法の執行、政治的自由と政治プロセスへの参加、快適で安全な環境、社会的な調和と秩序、民主的な人間関係、福祉の充実、個人における幸福の存在などを意味するのです。

ガルトゥングによれば、人が本来その潜在的能力を発揮できる状態以下であるような状況におかれているならば、その社会には(何らかの形で)暴力が存在します。例えば、平均寿命が50歳前後である国・地域の状況は、75～85歳である先進工業国と比べてみると、人として平等ではない状況があるわけで、そこにはある種の暴力、社会構造・制度に組み込まれた暴力である「構造的暴力」が存在するといえます。

例えば、21世紀の今、結核による多数の死者が発生するのは、構造的暴力が原因であると考えられます。つまり、医療設備や薬品が整備されてさえいれば予防できたはずなのに、治療の機会を奪われたことになるのです。

構造的暴力は、暴力の主体が何であるのか分かりにくく、流血を伴わず、<sup>かんまん</sup>緩慢・日常的・習慣的であるというような特徴をもっています。日ごろから軍隊という制度を維持するために、税金を徴収し兵隊を訓練するということなどは、直接的暴力と大きく違って、瞬間的に大破壊が起こるわけではないと思われがちで「目立たない」ため、ニュースにも取り上げられず、注目されないことから、問題が埋没してしまうという構造をもっているのです。

### <「文化的暴力」>

最後に、「構造的暴力」に加えてもう1つ暴力概念を知っておきましょう。ガルトゥングは1990年代に入ってから、「文化的暴力(cultural violence)」概念を提起するにいたります。直接的暴力、構造的暴力、文化的暴力は相互に依存・補完しあっています。文化的暴力とは他の2つに正統性を与え、支えているものです。例えば、神や祖国の名のもとに殺人を犯すことはどうでしょう。また、人類のなかのさまざまな弱者を根絶やしにするために、「弱者切り捨て」的発想で人々を窮乏のうちに死なせることなどはどうでしょうか。文化的暴力の中には、戦争を容認する意識や、私には関係ないと無関心な姿勢をとることが含まれています。そして、そういった姿勢や意識というものが、直接的・構造的暴力を正当化・合法化するのです。人は、言葉を用い、文化を形成しながら、自らの思想や行動の意味を見出すものです。そこから生まれて支えられる暴力を「文化的暴力」と名付けます。ですから、選民意識やナショナリズムのような、宗教やイデオロギーが生み出している諸問題も、文化的暴力となる可能性があるのです。

これらの暴力・平和概念を知ることで、一般に暴力とよばれるものの実態を、その深部から理解するために役立ててください。さまざまな社会状況、人間関係の中で、どういうことが起こっているのか分析してみてください。状況を整理して考える道具にしてもらえたら幸いです。

**\*プリント「暴力の関係性」の図もあわせて参考にしてください**

### 参考文献：

\*『ガルトゥング平和学入門』

ヨハン・ガルトゥング+藤田明史他、法律文化社、2003年(とくに、第1章「平和とは何か」)

\*『いま平和とは何か：平和学の理論と実践(グローバル時代の平和学1)』

藤原修+岡本三夫他、法律文化社、2004年(とくに、第4章「平和学へのアプローチ：平和・暴力概念を手がかりに」)

\*『平和学の現在』

岡本三夫+横山正樹他、法律文化社、1999年(とくに、第3章「平和：戦争の不在から暴力の不在へ」、第4章「構造的暴力と積極的平和」)